

会議議事録

会議名	第1回-1 教育課程編成委員会
開催日時	令和元年7月24日(水) 10:00~12:00
場所	本校舎2階 会議室
出席者	<p>① 企業等委員</p> <p>境 泰志 一般社団法人日本アパレル・ファッション産業協会 事務局長          吉川 順子 商品企画部ビューティーライフチーム(アパレル開発担当) ディレクター          津曲 公夫 株式会社 オアシススタイリング 代表取締役社長</p> <p>② 本校委員</p> <p>布矢 千春 本学院学院長          渡邊千佳子 本学院高度アパレル専門科科长          依田侑里子 本学院ファッションビジネス科科长          曾根 礼子 本学院教務課長          佐藤佐千枝 本学院教務課員</p>
欠席者	なし
配布資料	令和元年度 シラバス カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーについて 産学連携授業の主な一覧 特別講義一覧 成績評価基準について
議題等	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーについて</li> <li>2. 成績評価の基準について</li> <li>3. シラバスについて(特別講義と産学連携)</li> <li>4. 質疑応答と意見交換</li> <li>5. その他 次回の日程について</li> </ol>

以上

## 第1回-1 教育課程編成委員会の主な討議内容

### 第1回 教育課程編成委員会の主な討議内容

布矢院長：

○カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについて

今まで各科で育成人材像を設けていた。最近、専門学校でもアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについてきちんと定めそれを公表しているかが問われるようになった。今までは文書化したものを教員だけが持っていたが、学生手帳（キャンパスガイド）に掲載して明示した。

○成績評価について

成績評価について、学則にも定めているが、評価内容については詳しく落とし込んでいなかった。特に服飾造形は作品評価が多く、その公平性とドレメとしての基準をどこに置くかを話し合い、平準を“B”評価に定めた。

各教科長： 渡邊千佳子 本学院高度アパレル専門科科长

依田侑里子 本学院ファッションビジネス科科长

○シラバス

○カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについて

○特別授業について

上記の詳細を説明した。

布矢院長：学生募集するにあたり、服飾造形科と高度アパレル専門科との差別化が明確でなかったため、高校生にはその点を説明するようにした。また、ビジネス科については、ショップに必要な知識やスキルが学べる授業を実施している。

Y委員：お客様のクレームについて、生地の実験データの見方や製品表示についてはとても必要である。デザイナーになっても、素材についてあまり気にしない人もいるので、検査データを見て予測される生地の機能がわかるようになるとよいのではないかと。また、製作する時、製作の意図を話す機会を作ると訓練になり、実践的だと思う。

S委員：Eコマース、キャッシュレスのことなど社会人として必要なことを特別講義に取り入れて学ぶ事はとても大切である。法律、特に家庭用品品質表示法は必ず業界に必要。また、クリーニングの取扱いについて学ぶべきだと考える。世界の動き、オリンピック等の大きな行事によって商品の動きが大きく変わることを知る必要があると考える。特に来年卒業する学生は直面することになる。消費税についての知識も社会人として必要で、デジタルについても取り入れていくべきである。

T委員：成績評価基準についてのABC評価と点数についての整合性とGPAについてはどのような考えか。

布矢院長：現在検討中で成績基準がやっと文書化された。GPAについては、今後の課題であり、単位制について検討していかなければならない。成績については、合否判定会議において決定している。シラバスの中での成績評価の基準を示した。

T委員：単位制の導入について検討しなければならないのは、編入学する時、特にインターンシップで単位互換できるように整えていく必要がある。また、ファッションビジネス科では、他の学科では学べない点を打ち出すべきだが、2年課程の中でどれだけ満足の出来るものが出来るのか大きな課題となる。特別講義と普通の授業との関連性を把握し、それを自分の学びの中で実践していくか、つまり特別講義は授業の中でも生かされれば、学に厚みができる。

布矢院長：現状を分析して相乗効果が出るように考える必要がある。

会議議事録

会議名	第1回-2 教育課程編成委員会
開催日時	令和元年8月1日(木) 14:00~16:00
場所	本校舎2階 会議室
出席者	<p>① 企業等委員</p> <p>澤田 勘志 株式会社MORI パーソネル・クリエイツ代表取締役社長</p> <p>伊藤 弘子 ZEROZEROESUESU INC. 代表取締役/デザイナー</p> <p>藤田 泰史 株式会社日本アパレルシステム サイエンス 代表取締役社長</p> <p>②. 本校委員</p> <p>布矢 千春 本学院学院長</p> <p>峯岸 恵 本学院服飾造形科科長</p> <p>藤田 里恵 本学院アパレル技術科科長</p> <p>曾根 礼子 本学院教務課長</p> <p>佐藤佐千枝 本学院教務課員</p>
欠席者	なし
配布資料	<p>令和元年度 シラバス</p> <p>カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーについて</p> <p>産学連携授業の主な一覧</p> <p>特別講義一覧</p> <p>成績評価基準について</p>
議題等	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平成30年カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーについて</li> <li>2. 成績評価の基準について</li> <li>3. シラバスについて(特別講義と産学連携)</li> <li>4. 質疑応答と意見交換</li> <li>5. その他 次回の日程について</li> </ol>

以上

## 第1回－2 教育課程編成委員会の主な討議内容

布矢院長：

○カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについて

今まで各科で育成人材像を設けていた。最近、専門学校でもアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについてきちんと定めそれをきちんと公表しているかが問われるようになった。今までは文書化したものを教員だけが持っていたが、学生手帳（キャンパスガイド）に掲載して明示した。

○成績評価について

成績評価について、学則にも定めているが、評価内容については詳しく落とし込んでいなかった。特に服飾造形は作品評価が多く、その公平性とドレメとしての基準をどこに置くかを話し合い、平準を“B”評価に定めた。

各科科長： 峯岸 恵 本学院服飾造形科科長

藤田 里恵 本学院アパレル技術科科長

○シラバス

○カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについて

○成績評価について

上記の詳細を説明した。

I委員：実際に授業を担当していて、昨年から変化した点として、素材選びが変わってきた。素材への理解が深まってきているので、ファッションショーや写真撮影などで作品をどう見せるのかが大事になってくる。

F委員：仕事から企業の人事担当者とのつながりがあり、採用する側としての専門学校生を見てきた。ある専門学校では資料の作り方や見せ方がとても上手。徹底的に教員が指導している。面接では良さそうだったが、実際入社してみると基礎が出来ているのかで違ってくる。ドレメではせっかく基礎が出来ているので、ポートフォリオやプレゼンテーションなどに力を入れていくともっと良い点が引き出せるのではないか。CGスキルや動画、SNS系知識も積極的に取り入れることで、就職してからも活かされるだろう。デザイナー、パタンナーについては、MDとコミュニケーションをとっていかなければならない。以前はしゃべれなくとも技術や人柄が良ければ良いという傾向があったが、最近はコミュニケーションのためのプレゼン能力も必要である。

布矢院長：本学の学生は、面接ではおとなしく、それがコミュニケーション能力がないと見られてしまう。デザイナーでも専門学校生の方が技術力はあるものの、大学生を採用するということがあり、技術以外の所も見ているのだと思う。

S委員：学生の興味を持っている点とカリキュラムがフィットしていないと中々学習効果が出てこない。何を考えているかを伝えてくれる人にならないと仕事は発展しない。考えていることを形にできるが、言葉で説明が苦手な人が現場でも多い。教育の場面でコミュニケーション力を磨いて欲しい。

布矢院長：接客スキルという授業の中でも取り入れているが、言語能力が必要ということを実感した。発表させるにしてもきちんと調べたり、フィールドリサーチをしたり、知識のストックや裏付けができていないと自信を持ってプレゼンできない。授業の中でその機会を与えていくことが大切である。

S委員：言語だけの問題ではなく、日本と世界の境目のない時代になっている前提で伝えてボーダレスの意識を持っておかないと就職後につらいことになりかねない。英語力を高めれば良いというだけでなく、何にでも好奇心を持つ感覚が益々必要になってくる。留学生についても、外国人雇用規制の緩和が進んでいるので販売職の採用が広がるのではないかな。

会議議事録

会議名	第2回-1 教育課程編成委員会
開催日時	令和元年 11 月 21 日 (木) 11:00~12:00
場所	本校舎 2 階 会議室
出席者	<p>③ 企業等委員</p> <p>境 泰志 一般社団法人日本アパレル・ファッション産業協会 事務局長          吉川 順子 商品企画部ビューティーライフチーム (アパレル開発担当) ディレクター          津曲 公夫 株式会社 オアシススタイリング 代表取締役社長</p> <p>④ 本校委員</p> <p>布矢 千春 本学院学院長          渡邊千佳子 本学院高度アパレル専門科科长          依田侑里子 本学院ファッションビジネス科科长          曾根 礼子 本学院教務課長          佐藤佐千枝 本学院教務課員</p>
欠席者	なし
配布資料	平成 30 年度 自己点検評価書 全科カリキュラム分類一覧
議題等	<p>6. 平成 30 年度 自己点検評価書をふまえて ファッションビジネス科と高度アパレル専門科の授業について委員より所見をいただく。</p> <p>7. 質疑応答と意見交換 ファッションビジネス科と高度アパレル専門科の意見交換が行われた。</p> <p>8. その他 全科カリキュラム分類一覧について説明</p>

以上

## 第2回-1 教育課程編成委員会の主な討議内容

布矢院長より

第三者評価を受審するため審査に必要な「自己評価報告書」を作成した。定められた基準の項目ごとに自己評価をしたことにより各課題を確認し、解決策ができていないか再確認をした。お読みいただいた「自己点検報告書」をふまえ、それぞれご意見を伺いたい。

T委員：第三者評価は、教育に関わる棚卸したものを評価してもらうのが一つの方針だと思う。ファッションビジネス科の学生が、業界の中でどういうことが要求されるのか、他の学科と明確に違う点はどういう事か、を理解する必要がある。

布矢院長：今までのファッションビジネス科はブランディングをやってきた。ファッションビジネス科は、服飾造形の基礎力が薄いため、そこを来年から強化する。また、ショップのケーススタディの分析で始まり、ショップ提案できるものに変えて行く。ブランディングについては、高度アパレル専門科で強化している。ファッションビジネス科はリテールに絞ったリテールブランディングにする。架空のものを作らせるのは、発想が広がらない。今までやってきたブランディングをやめて、店頭での提案に移行している。学びとしてリテールを柱にしながら“サステイナブル”がどこまで出来るかが課題である。

T委員：2年課程でどれくらいの幅と奥行きを提示するかに拠る。他校にしてもファッションビジネス科は、2年制で良いのかという問題もある。何に特化したら良いのか。

最初に消費者の変化が現れるのは小売業なので、ここに業界も目をつけている。21世紀になって、百貨店、アパレルの業績が良くない。想像もしなかったことが起こっている。そこで授業のコアとなる部分は、“マーケティング”ではないか。“マーケティング”という授業を通じて会社との接点を持っていく。授業の大半が企業との接点によって成り立っていくという事になってもおかしくないと思っている。

布矢院長：本学は2年課程のファッションビジネス科でどういう学生を輩出していられるのか。店舗に絞り、セールプロモーション、ポップアップまでのプランまでを学ばせる方向性が固まった。また、企業の店舗とつながっていないと難しい点もある。業界でのケーススタディで学んでその上で何が提案できるかを2年で実施しようとしたところが苦しかった。小売業ではお客様との接点と考えていて、顧客も変わってきているので難しいが、学びの進化が必要である。次年度からは、リテールのプランをやっていくにあたり、好奇心を掻き立て、たくさんものを見聞きして、視野を広げられるよう学生をリードしていく。

S委員：特に専門職の採用についてOEMの絡みが多くなってきているのと、バイヤーの仕事の範疇が多くなってきている。デザイナーとして入社したが、結果的にはバイヤーとして商品を仕入れる仕事をしている例がだいぶ増えている。業界のものづくりから、最後の店頭を意識した仕事になっている。特にアパレルメーカーについては、システムを変えていかなければならなくなっている。店頭のコストが高くなっている。専門職のパターンにしてもまずは店頭の経験をしてもらう。そこから次のステップアップをしてもらう。アパレル全体でいうと店頭で勝つというところを、学校として強調する点を1つ2つ取り入れていくと、ドレメの強みがみえてくるのではないかと。

布矢院長：本学でもどこを差別化していくかというのを課題としている。オリジナルをどう打ち出していくのが課題である。

Y委員：財務の点から、学生の確保が非常に重要ではないか。学生の確保をどうするのかを具体的に考えていかなければならない。海外からの留学生を積極的にとっていくのか。また、ファッション業界に対する“魅力”がないのかも含めて、学び直しなどの大人が学べることに広げていくなど。ドレメについては、昔に比べて今のドレメが知られていない。ドレメの特徴は一言で言うと何なんだろう。昔は花嫁学校だったと思うが、今の人はどう思っているのか。“即戦力”や“マーケットター育成”などの一言で言える事が大切ではないか。

布矢院長：昔は花嫁学校、洋裁店のイメージがありながらも、技術があるということは認知されてきた。現在でも技術のドレメと言われているが、業界での印象と高校生に与える印象とは違う。キャッチコピーは必要だが、技術力や人間力も育成していく中で何が特徴なのかは悩ましいところである。企業を下支えする確かな技術力を育成するという大人しいイメージをどうアピールしたら良いのか考えている。

Y委員：デザイナーは優れた発想だけでなく、コミュニケーションつまりデザインを言語化できることが企業の中では大切だと思う。また、優れたパターンナーがいると仕事が楽で修正すらすぐ済んでしまう。そういう人材を育てていると思うが、それを高校生に対してどう伝えるのが課題である。

T委員：経営が先に来ると教育がなかなか難しい。若い人にとっての有名ブランドと大人のブランドは違ってきている。若い人にとって旬のブランドを入り口にして知ってもらう必要がある。せっかく色々な取り組みをしているのなら、若い人に人気の事を取り込んでいかないと振り向かない。1年生での退学率をどう是正するのか。実態は入学したら違っていたということだろう。いかに入学前のマッチングをオープンキャンパスだけでなく思い切って別の角度から捉えてみることも必要なのではないかと。ファッション業界でのグローバルのクリエイティビティは何か。国内だけでなくドレメのグローバル戦略をどう

するのも考える必要がある。

布矢院長：高校生には衣装をやりたい人が多いが、実際の就職先は少ない。業界の持っている問題と学校が持っている問題点を解消しなければならない。

#### ■全科カリキュラム分類一覧(マトリックス)について説明

本学の理念“自立”“創造”“挑戦”が教育カリキュラムに落とし込んだマトリックスで、尚かつ新しいものも取り入れている。分類ごとに目指すレベルに到達できるかを計るために作成した。来年から1年生の基礎造形の授業は高度アパレル専門科、アパレル技術科と合同で実施する。マーケットリサーチを全科に入れ、ケーススタディあるいはリサーチの方法を学ばせるように変えた。デザインを形にすることについても、平面と立体両方で表現することをやらせたい。

会議議事録

会議名	第2回-2 教育課程編成委員会
開催日時	令和元年 11 月 21 日 (木) 14 : 00 ~ 16 : 00
場所	本校舎 2 階 会議室
出席者	<p>①. 企業等委員</p> <p>森 雄祐 株式会社 MORI パーソネル・クリエイツ代表取締役副社長  伊藤 弘子 ZEROZEROESUESU INC. 代表取締役/デザイナー  藤田 泰史 株式会社日本アパレルシステム サイエンス 代表取締役社長</p> <p>②. 本校委員</p> <p>布矢 千春 本学院学院長  峯岸 恵 本学院服飾造形科科长  藤田 里恵 本学院アパレル技術科科长  曾根 礼子 本学院教務課長  佐藤佐千枝 本学院教務課員</p>
欠席者	なし
配布資料	平成 30 年度 自己点検評価書 全科カリキュラム分類一覧
議題等	<p>9. 平成 30 年度 自己点検評価書をふまえて 服飾造形科とアパレル技術科の授業について委員より所見をいただく。</p> <p>10. 質疑応答と意見交換 服飾造形科とアパレル技術科の意見交換が行われた。</p> <p>11. その他 全科カリキュラム分類一覧について説明</p>

以上

## 第2回-2 教育課程編成委員会の主な討議内容

布矢院長より

第三者評価を受審するため審査に必要な「自己評価報告書」を作成した。定められた基準の項目ごとに自己評価をしたことにより各課題を確認し、解決策ができていないか再確認をした。お読みいただいた「自己点検報告書」をふまえ、それぞれご意見を伺いたい。

I 委員：産学連携授業を担当して2年目になり、オリジナリティのある服を作ることをコンセプトにしていきたい。出来上がった服のクオリティーも上がってきたが、服の歴史の勉強を強化してきた中で生徒のモチベーションが上がってきた。それが作品にも反映された。これからサンプルを生産に向けていく中で、全部が生産されるわけではないが、その家庭を実感する中で、デザインする目的が見えてくる。企業で働く中での自信にもなる。

布矢院長：商品を作る作業の中で、コンセプトワークから掘下げて物を作ることを大切にしていきたい。今年度は各自で服装史を学ばせたが、来年度は、現代服装史を教える非常勤講師がいるので特別講義を行い、レベルアップしていく。

I 委員：中国の工場もあるので、製作工程には予想以上の時間がかかる等のスケジューリングも実践できた。最後にコーディネート、写真撮影、マーケットリサーチ等の他の科目との相乗効果もできているのを感じた。

布矢院長：産学連携授業については、学校側で動かなくてはいけない部分が多くかなり大変ですが、よりよいものになり、企業も協力してくれているところも出てきている。今回の自己点検報告書作成についても、過去はより良く書こうとしていたが、PDCAのチェックとして捉え、出来ていないところをどう改善していく場と考えてきた。

M委員：企画書やマップを作れて、それを活かせる学生の育成をしていると思うのですが、実際デザイナーを希望する生徒であっても、実は仕事の内容や適正はまだわかっていない。実際、採用のシーンで企業からのニーズを聞くと、ODM型のデザイナーとブランドアパレルのデザイナーとは求人条件が全然違う。ODM型のデザイナーは、相手が絞られていて、その先方からのザセッションで作りこむ。作りこむということが好きな、むしろパタンナーの気性に近い学生が適している。アパレルデザイナーは、幅広い意味でファッションが好きで、クリエイションが好きで、スタイリングを考えて広げていく考え方が好きな学生が適している。これは、育成の仕方が違ってくる。ODM型の学生がアパレルデザイン型に転職しようとしても、壁があり意外と行けない。さまざまな道があるということを示した上でセレクトさせていく

と良いと考えている。デザイナーは、相手が言っていることを把握することが出来る能力が必要で、企画に活かしてきちんとしゃべれる能力が必要。学生の中から、自分の適性が感じられるようにすると良い。デザイナー企画も何種類かに分かれていて、仕様書を書かせたり、スタイリングでスタイル画を書かせたり、実際に求められるスキルが全然違う。これがわかっているならば、キャリアパスを持つことが出来る。

布矢院長：パタンナーに近いデザイナーとバイヤーに近いデザイナーがあると考え、教育の内容をアパレル寄りとクリエイション寄りとに分けつつある。修学年内でどう教育していくかを考えなければならない。パターンが出来る学生とクリエイションの強い作品づくりを経験してアパレル業界に入っていく学生を育てたい。問題なのは、高校生が入学する場に入り口のところでそれを選ばなくてはならないという点がある。科を分けている点で、いかに見える化できるかを踏まえて説明していく。

F委員：コミュニケーション能力について、自分で発信する、人の話を聞く、両能力を学んでいく必要がある。仕様書の作成の能力についても、理路整然と書けるようにならないといけないことを体感してほしい。中国の工場等で外国人に外国語で伝えるとなると、誤解のないように伝えなければならない。授業で、中国の工場を使っていることでリアリティーがあり、いろいろな気づきがあっただろう。そのことの重要性を実感してほしい。グループで仕事をする場合、専門職が多い中でマネジメント能力が不十分な場合が多く、仲間をどう使い、納期や仕事の方向性を示すことも勉強して動機づけをすると良い。

布矢院長：科を超えて連携が出来るかどうかの一つの課題で、2年課程の中でどこまで教えていけるかも課題。現在でもクラスの中でグループワークをしているがどう評価するかの基準を設けるかが課題である。

M委員：アパレルの人事の評価基準を反映させることも出来るのではないか。技術系、デザイナー等の評価基準もある。

布矢院長：3Dの教育については、どの辺の地点でシステムが変わっていくのか、教育現場でも将来構想が必要だという意識づけをしたい。

F委員：各社の3Dがそれぞれ違うが、どういう着地点になるのかが現場でも知らなければならないと思っている。

布矢院長：今年は、全学でサステイナブルの授業に取り組んだ。アパレルの在庫になっているものをリメイクする段階は経験しているので、次の段階として、違うやり方でサステイナブルを学べることを考えている。

M委員：サステイナブルとなると、新しい商品が動かないとビジネスにのっていかない問題がある。今、新しい流れがあり、お直しからリメイクに発展し、総合セールの店を出している。素材が良いのにデザインがおかしいものを今時のデザインにすることによって、服が生き返るといのが広まっている。そこにニーズがあるのが、縫える人だがその人達は接客が出来ない人が多い。だが、ハイブリットな人材が出てきたら即採用したい。サステイナブルとなると、こういう人材が必要となってくるだろう。社会人になってからではなかなか育成しにくいので、学生のうちに学ばせて行けると良い。

布矢院長：リメイクショップに就職を考えている学生には“コミュニケーション”と“縫製”をキーワードにして育てていきたい。

#### ■全科カリキュラム分類一覧(マトリックス)について説明

本学の理念“自立”“創造”“挑戦”が教育カリキュラムに落とし込んだマトリックスで、尚かつ新しいものも取り入れている。分類ごとに目指すレベルに到達できるかを計るために作成した。来年から1年生の基礎造形の授業は、服飾造形科、ファッションビジネス科と合同で実施する。マーケットリサーチを全科に入れ、ケーススタディあるいはリサーチの方法を学ばせるように変えた。デザインを形にすることについても、平面と立体両方で表現することをやらせたい。